

導きの旅路で。

アリーナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——運命とは、引き寄せ合う導きの力。

それは誰にも再現出来ない奇跡。

誰にも縛り操る事の出来ない、神の理なのかもしれない。

そしてそれは、誰の隣にあるもの。

『……は、一体何処なのだ……。』

……運命は、華開く。

『お前、見かけねえ顔だな……。  
こんな田舎に何の用だよ。』

……運命は、交差する。

『え？ここはアメストリスの…  
セントラル東の村、リゼンブルだよ！』

……運命は、混ざり合う。

やがて縛れ、解け、また絡み合い。

いつの日か運命の糸は、  
定められし旅路の導きとなるだろう。

――――――――――――――

どうも！作者のアリーナです！

鋼の鍊金術師 F A × ピサロのクロスオーバーです！  
SS 書くのは初めてなので、まだまだ未熟ですがよろしくお願ひします！！

【ストーリーはリア友のカリムと共同で考えています！  
執筆は私、アリーナが担当です。】

目

次

終焉と始まりの狭間

真理の扉

物語の始まり

15 6 1

## 終焉と始まりの狭間

……焼け付くような痛みが身体中に走る。

(まさ、か……こんな事が…。)

揺らぎ倒れて行く体は、最早私の意志が動かせるモノではなかつた。それでも諦めきれず必死で手に、足に、心臓に、力を集中させる。

(そんな、筈がない……進化の秘法を手に入れた私が、こんな……。)

こんな下等な人間に、負ける訳が無い。

……いや。

「……負けて、溜まるものかッ……！」

身体はまだ動く。意識はまだある。  
私はまだ生き永らえている。

……ならば、最期まで。

私は血の滴る身体に全力を込めて、両腕の魔剣を力の限り振りかざした。

私の放つた衝撃波と勇者の白い光が激しくぶつかり合い、立つていられぬ程の突風が吹き荒れる。

「…………つツ……!!」

再び燃えるように痛む身体。霞んで行く視界。しかし勇者も同じ位のダメージを受けている筈だ。

思つた通り、勇者は現界を迎えつつあった。よもや回復魔法すらも追いつけずに、両腕は震え、頬は苦痛に歪んでいる。

(…………なのに、何故だ。)

今にも崩れ落ちそうな程に弱り、  
それでも。

(…………何故、その瞳を止めない……!)

勇者の翡翠色の瞳には、まだ生きている。いくら打ちのめしても決して消えぬ強い光が。

…………何故。どうして。

私利私欲で「彼女」を手にかけるような、下等で卑劣な生き物。

我ら魔族の足元にも及ばぬ力しか持たぬ、愚かな人間共。

なのになぜそんなにも強い瞳ができる?

(まるで、その瞳は……)

ほんの一瞬脳裏をよぎったその笑顔を振り払い、私は再び腕に力を込める。

「ツつああ』『あ』『あツツ!!!』

渾身の一撃に、勇者の身体はぐらりと傾むいた。

(あと一撃でつツ……!!)

私は勇者に止めを刺すべく、最期の力を放つ。

……………その刹那。

「…………ピサ、口、様…………わたしの最期の、わがまま…………どうか、野望を捨てて、わたし、と……。」

…………記憶の底を漂う透き通つた声。

「——どうか、

人間の全てを恨まないで…。」

封じ込んでいた温もりが弾け、  
同時に弱まる力。

その瞬間、  
勇者の放つた一撃が私の心臓を貫いた。

「ぐあアア　あ　あ　アああつツツ  
!!!」

熱く崩れて行く身体。

薄れて行く意識。

憎むべき人間。憎むべき勇者。

彼らを赦すつもりも理解するつもりも私には無い。

(……皮肉だな。)

ずっと分からなかつた。彼女が今際の際に零した最期の頼み。

彼女こそが一番人間を憎んでいる筈だつた。恨んでいた筈だつた。

(……だが、恨むなど。)

今でも分からぬ。その言葉の真意が。

だが勇者を殺す事を拒んだのは、他でもない。今でも分からぬ最期の「わがまま」だった。

「ハツ……皮肉だな、本当に…。」

彼女の仇を、彼女の「わがまま」により撃ち損ねたのだから。

(……口ザリ。いつか、私にも…)

……わかる日が来るのだろうか。

お前の「わがまま」の、本当の意味が。

## 真理の扉

……そこは、何もない空間。

視界にはただ延々と白が広がり、ある物といえば扉が一つ。そしてその扉の前に、黒い服に身を包んだ銀髪の青年が倒れていた。

傷だらけの青年は暫く気を失っていた様だが、やがてゆっくりと瞼を開けると合点のいかない表情で辺りを見回す。

「ここは……。一体何処なのだ？」

青年……進化の秘法を打ち破られたピサロは、まだ癒えずに痛む傷を押さえながら、この白い空間を見渡した。

そこは彼が先程までいた場所、デスマウンテンとは似ても似つかぬ静かな所で、霧がかつたようにぼんやりとしていた。ピサロの脳はだんだんと冴えて行く。

それに伴い彼の頭は、少しづつ現状を理解し始めた。

——ああ、そうか。つまり私は……。

(あの時、勇者の一太刀を受けて死んだ…。)

瞬間、鮮明に蘇る自分の最期。

勇者の剣に心臓を貫かれ、同時にスローモーションの様にゆっくりと流れ去る時間。

水が蒸発するかの如く、霧散し消える己の手足。

そして暗黒に包まれたデスマウンテンに、登る筈のない太陽が輝き始める景色。

——その後の事はわからない。

ただ気付けばここに倒れていた。

「……ではここは、

死後の地獄か何かか？」

ぱつりと呟きながらも、ピサロは自らの言葉に嘲笑する。死後の世界など信じてはいないし、そんな世界があるなら、どうの昔に「彼女」を其処から連れ戻している所だ。

(だが、ならば此処は一体…。)

彼は柄に無いくらいに途方に暮れていた。

…まあ無理もない。それ位にそこは、常軌を逸脱した場所だつたのだから。

その空間の中にある物といえば、奇妙な文様の描かれた巨大な扉ただ一つ。今のピサロの力では到底開けられるとは思えぬが、それ以外に希望は無い。

彼は扉の目の前へゆっくりと歩き出す。  
そして、

引き戸に触れようと両腕を伸ばしたーー。

その時だった。

『……無理だ。お前には開けられない。』

両手が扉に触れた瞬間背後で響いた声に、ピサロは素早く剣を抜いて振り向きーー、

(…なツつ……!?)

——そこにいたのは、  
人の形をした人ならざる者。

身体の輪郭や形こそ人間に似ているが、目も鼻も髪もない。人型に  
口だけがついた様な奇妙な姿をしていた。

思わず目を見張ったピサロに向かい、  
「それ」はゆっくりと口を開く。

『悪いが、あんたは通せない。

「通行料」を払つてない奴はな。』

「通行、料……!?」

『それ』の言う「通行料」の意味が解せず戸惑いと苛立ちを露わにする  
ピサロだが、「それ」は余裕の表情で一人言葉を続ける。

『それにしてもあんた、彼方の世界じや随分とやらかしてきたみたい  
だねえ……。

ココに飛ばされてきたのも領けるよ。  
なあ魔王様?』

「……!?

……貴様は何者だ。

何故私の事を知っている!』

ピサロは数瞬のうちに走り出すと、警戒と敵意を剥き出して「それ」に剣を振り下ろしたが、斬る事はしなかった。

……否、斬れなかつたのである。

振り下ろされた剣は、「それ」の身体を確かに貫いていた。——しかし。

「な!? 実体が……無いだと……!?!?」

ピサロは「それ」の体から素早く剣を抜き鞘に収めると、数歩後ずさる。

相手が倒れ無いのも、斬った手応えがないのも当然だつた。そう。——何故なら。

『……俺は人であり、人では無い。

俺は一。或いは全。或いは真理。そして……

俺はお前だ。』

「それ」……「真理」は、ピサロに向こうと静かに言の葉を紡ぐ。あ

たかも彼の胸の内を知るかの様に。

『お前はまだ死んではいない。此処は言うならばスタート地点なんですよ。』

「そんな馬鹿な……、

私は確かに死んだ!!

勇者の剣に心臓を貫かれて……！」

彼の言う事は正しかつた。

確かにあの時魔王デスピサロは勇者により葬り去られた筈だ。

——だが。

『確かに「魔王デスピサロ」は死んだ。

……だがお前には…「ピサロ」にはまだ死ぬ資格は無いと言う事だよ。』

「真理」は続ける。ピサロの切れ長の瞳に映る鈍い光を、2年前訪れた少年のそれに重ねながら。

『お前には、まだ死ぬ資格は無い。

彼方の世界でお前が知れなかつた感情、感覚…。それらを学び手に入れさせる為、世界はお前に命を与えたんだ。

元の場所で朽ちる筈だったお前の体は、

弾け飛んだ「進化の秘法」の力を集め凝縮し、心臓に宿す事で生きている。

……わかるか？「世界」は特殊な力を使う事でお前を生き長らえさせた。

新たな場所で、生きてその業を償い新たな感情を学ばせる為にな。』

「……見ず知らずの場所で、

一から生き直せと？」

悪いが私は贖罪するつもりなど毛頭無い。全て己なりの信念と信条に従い行つたまで…。愚かなる人間に對して罪の意識も無ければ、奴らを理解し「新たな感情」とやらを学ぶつもりもない。

：罪の償いの為再び与えられた命だと言うのならば、今ここで絶つてやるまでだ。」

ピサロは「真理」を見据えると、魔剣を自らの首筋に突き付ける。……彼にはこれ以上生きていく理由も、命を惜しむ理由もなかった。

だが「真理」は至つて冷静な様子で

「ああ、言い忘れてた。」と呟く。

『そつちにも明確なメリットが一つ有るのを忘れていたよ。

……お前の愛した女の、最期の言葉。

新たな場所で生きる事を受け入れるなら、その意味がわかる時が必ず来るだろう。』

「…………！」

その瞬間、ピサロの手が止まつた。

——贖罪をするつもりも、人間を理解するつもりも無い。  
だが、「彼女」のあの言葉を——

「——どうか、

人間の全てを恨まないで…。」

——彼女の最期のわがままの、  
その意味がわかると言うのなら。

(ロザリ一、……私は…。)

『さあ、どうする?』

「真理」の声が白い空間に響くと同時に、カラーンと乾いた音を立てて、  
ピサロの手から魔剣が滑り落ちた。

再び、

真っ直ぐに「真理」を見据える灰色の瞳。

『——それが、お前の答えか。』

「真理」がニヤリと笑みを浮かべると、扉が眩い光と共に開いて行くのは同時だった。

溢れ出した光は、瞬く間にピサロの身体を捉えて扉の中に引きずり込んでいく。

「がつッ……!! 待て 「真理」 ツ !!?  
まだ質問は残つて……！」

『俺が教えられるのはここまでだ。

「通行料」は適当に見繕つてやるから早く行け。』

その言葉を最後に、ピサロを飲み込んだ扉は閉まつて行つた。

完全に閉じられた扉の前で、

「真理」は一人笑う。

……それはまるで、

ピサロと「彼ら」との運命が交わる事を予測し、楽しむかの様に。

## 物語の始まり

——此処はリゼンブルの東、  
アメストリス村。

のどかで穏やかなその村は今日も朝日に照られ、木々や湖を美しく光らせている。

そして少々冷え込んだ川辺の空気の中で、ゆつたりと寝息を立てる金髪の少年が一人。

僕は小さく溜め息を吐いて金髪の少年……。兄であるエドワード・エルリックの元へ歩み寄った。

「兄さん、

こんな所で寝てると風邪を引くよ?」

ガシヤガシヤと鎧の歓つい音を響かせながら揺さぶれば、ゴシゴシと目を擦りながらノロノロ身を起こす。

「……ンだよアル……。

人が気持ちよく「朝寝」してたつてのによく……。」

「寝るなら家のベットで寝なよ……。それに朝から勝手に出歩いたりしちゃ駄目だつて! ウインリイがカンカンに怒つてたよ?」

兄さんは僕の言葉に「ウエツ」とあからさまに嫌そうな顔をして再びゴロリと転がつた。

「ちよつと兄さん……!」

「つたく、アルもワインリイもばつちゃんも心配し過ぎなんだよ……。リハビリは順調なんだし外に出るくらいはなんて事ないだろ?」

「順調って言つたつて、何も病み上がりに無理してリハビリする事無いじやないか!!最終調整が済んでないうちは身体への負担も大きいんだし……。」

そう……実の所兄さんは昨日の夜まで高熱を出して寝込んでいたのだ。『唯でさえ危なつかしいのに病み上がりにリハビリなんてとんでもない!!?』と昨日ワインリイやばつちゃんに止められていたのだが、朝起きて見ればベットはもぬけの空。慌て探しに来て見れば本人はリハビリを終えて川辺で朝寝をしているのだから驚いた。

「……兄さん。焦る気持ちはわかるけど、本来三年かかるものを一年で済まそうとしてる時点で大変なんだ。これ以上無理してたら元の身体を取り戻す前に生身の体が壊れちゃうよ?」

兄さんは僕の言葉を解ってくれたのか否か、ぼんやりと空を見上げたまま、何処か遠くを見ていた。

——やがてゆっくり目を閉じて、  
ぽつりと呟く。

「……自分を労わる暇があるなら、  
俺はその分前に進みたいんだ。」

次に僕の鎧の身体と自分の手足をじつと見つめ一瞬自嘲気味た笑いを浮かべたが、すぐにいつも通りの空笑いに戻った。

「身体を失つたのは俺達の…、俺の自業自得だ!! 無理でも何でも踏ん張り続けるつきやないからな！」

「……兄さん…。」

兄さんは金髪を揺らしながら「よつと！」と起き上がり、腹が減つただの、ワインリイにまたスパナを投げられるだのぼやきながら家路を急いで行く。

(……ほんと、何時も無理して……。)

本人は上手く隠してるつもりなのだろうが、強がってる時の癖くらい僕やワインリイにはすぐ分かる。

目を少し瞬かせて、  
まるで涙を散らしてゐみたいに。

(兄さんが目的の為に自分の身を削るつて言うなら、僕は……。)

せめて隣で、その背中を守れるように。

僕は何となく伸びをすると、兄さんの後を追おうと立ち上がった。

——その時。

「おい、アンタ大丈夫か!? しつかりしろよ！ おい！」

近くで兄さんの大声が聞こえ、慌てて駆け出すと反対の川辺に銀髪の青年がグツタリと倒れているのが見えた。

「!? 兄さんその人どうしたの…!?」

「わからぬえけど酷い熱だ!! アル、ばつちゃんの所に運ぶぞ!!」

僕は頷くと青年を抱き上げ、ロックベル家に向かい歩みを進める。気を失っているらしい青年は苦しそうに息をしていたが、その苦痛の表情を見ていた僕は何処か違和感を感じた。

(……なんだ? 何なんだろう、  
この感じは一体…?)

しかし違和感の正体はすぐ目の前まで来ているように掴めず、歯痒さにおかしくなりそうだ。

確かめるかの様に兄さんの顔を見れば、兄さんも僕の顔を見て小さく頷く。

「アル……お前も感じたか?」

「うん…よくわからないけど何だかおかしいよ、この人……」

兄さんは険しい顔つきで考え込んでいたが、やがて何かを思い出したかの様に表情を凍らせる。

「兄さん？ 何か解つたの!?？」

「…………の、…………や…か。」

兄さんは僕の声が聞こえているのかいないのか、魂が抜けたかの様な真っ青な顔をで何か呟いた。

「……? 聞こえないよ、兄さん何て言つたの?」

その瞬間ハツと正気に戻った兄さんは、作り笑いを浮かべて「何でも無いから気にすんな！」と誤魔化し話を逸らす。

「そんな事より取り敢えず急げ!! もうワインリィン家はすぐそこだ！」

「あ……うん!!」

走るスピードを上げる僕達だが、胸の内にはまだ得体の知れない違和感が叢食つていて。それはまるで、キッチ締め付けられた記憶を何かこじ開けようとするかの様で、その感覚は僕に不思議な確証を生む。

(この人はきっと……)

僕達の行く道に、  
共に影を落とす人なのかも知れないと。